

夫婦喧嘩を猫が食う

星谷光洋

ぼくの二十九歳の誕生日に、故郷の荒井浜で父と母の墓参りをしたあと、近くの駐車場でしばらく休んでいたときだった。どこからかミャーミャーと、どこか物寂しげな猫の鳴き声が車の下から聞こえてきた。外にでてみると、よろよると倒れそうな子猫がでてきて、ぼくの足にしがみつき、そのままぼくの肩まで登ってきた。そしてぼくの肩に爪を立てて、離れなくなってしまった。ぼくの誕生日ということもあって、なにより縁を感じた。体は赤ちゃんのように四頭身で、みているだけで母性本能をくすぐられてしまった。ぼくは男性なのだが、男性にも女性ホルモンがあるらしい。この愛おしいと思う気持ち、守ってあげたいという思いはおそらく母性本能なのだった。ある意味、ヒゲの生えた母性本能なのだ。

近くに人家はない。捨て猫なのだろうか。この猫を飼ってあげたい気持ちはあるのだが、ぼくの妻の美子が、ペットを飼うことに強く反対していたのだ。美子は三十歳で、ぼくよりもひとつ年上だった。ファンタジ的な物語やアニメ、そして海や自然の風景を眺めることがふたりとも大好きだった。そのうえふたりとも音楽好きで、生まれ変わりがあるとしたら、きつとなれども出会ってきた人なのだと思う。ぼくより背が低い和風美人だ。美子は決して動物が嫌いかわけじゃない。ぼくと同様、子供の頃から金魚や猫、犬、小鳥などを飼い、動物園や水族館で動物たちをみるのは楽しいが、狭い檻に入れられている動物たちが可哀想になり、しだいに寂しい思いになるらしい。そんな美子が、十五歳の頃から十数年ほど飼っていた犬の風太郎が病気で死んだ。それからいわゆるペット・ロスになり、あまりの悲しみ、寂しさに、二度とペットは飼わないと

決めていたのだ。

しかし、おなじヒゲ族としてほっておくわけにもいかない。ぼくが仕事をしているホームセンターの店に行き、牛乳と猫の食事用であるドライタイプと猫用の缶詰、トイレット砂を購入した。それから書店に行き、猫の飼い方が書いてある本を数冊購入した。

家に帰ると美子は買い物らしくいなかっただ。さつそく子猫に食事をさせてみる。しかし、ドライタイプも缶詰も食べようとしない。どうやらまだ離乳食まえの子猫のようだった。捨てるにせよ、こんな赤ちゃん子猫を捨てるなんて、いろいろと訳はあるのだろうが、無性に怒りの気持ちがあわいてきた。とにかく子猫は猫用のミルクは飲んだ。どうにか元気になりそうだと一安心した。ぼくは子猫にミャーという名前をつけ、そしてしばらく家の二階にあるぼくの書斎でミャーをかくまうことにしたのだ。もともと父親の建てた家だったが、ぼくの部屋にし

ていたところを書斎と称して、インターネッ  
ットや読書などをする場所としていたのだ。  
この部屋には美子も入らない。一人で読書  
をし、書き物をしているときには邪魔しな  
いという取り決めがふたりでかわされてい  
たのだ。しかし、ぼくが家にいないときのこ  
とを思うとミヤーを残しておくのは心配だ  
った。

ミヤーと暮らしはじめてから、一ヶ月ほ  
どたったある日、ぼくとミヤーの関係に転  
機が訪れた。ぼくがミヤーに猫用のミルク  
をつくり飲ませているときだった。ぼくの  
怪しい素振りになにかを感じていたのか、  
美子がこっそりと階段をあがってきて、突  
然ドアをあけたのだ。

「満彦、なにをこっそりとやっていると  
思っ  
たら」

美子の怒っているときの低い声が、ぼく  
の耳を直撃し、

「ごめん、話そうと思っていたんだけど」  
ぼくは、借りてきた猫のように、美子の顔色をうかがった。

眉間に皺を寄せた美子の顔が、しだいに柔らかくなり、微笑みに変わった。ミヤーは美子の姿をみつけると、すぐにミヤーは美子の足にまとわりつき、ミヤーミヤーと、必殺女殺しとぼくが名付けた、本家本元の猫なで声で鳴いた。

「可愛い猫ね、どうしたの？」  
ぼくは急いで事のいきさつを話した。すると美子の顔がしだいに怒りの形相に変化してきた。目が潤み、唇が震えてくるのが危険を知らせるサインだ。

「あ、ほんとにごめん！」  
「満彦に怒っている訳じゃないの。こんなミルクしかまだ飲めないような子を捨てる無責任な人に怒っているのよ！」

美子とは二年前に結婚したのだが、まだ子供はいなかった。だが、さすがに子供の頃

から猫や犬たちと暮らしていたせいで猫の扱いがうまい。赤ちゃんを抱くように、やりわりと足と胸のあたりをすくうように抱きあげて、

「よしよしい子だね。おじちゃんはタバコを吸っていて、猫ちゃんの体に悪いから、お姉さんのところにいようね」

と、めったに聞けないような優しい声でミヤーの額のあたりを優しくなでていった。ぼくもミヤーになりたいものだとい瞬思った。

それにしても美子がひとつ年上なのに、なんでぼくがおじちゃんや美子がお姉ちゃんなのか、とは思ったが、どうやら一緒に暮らすことには同意してくれたようだ。ぼくは心のなかでほっとしつつも、舌をだしていた。美子は母性本能のかたまりのような人だから、子猫の愛らしさに太刀打ちできはしないと思っていたのだ。

美子はそれから延々と今のペット事情を

力説しはじめた。美子がまだ子供の頃は、猫も犬も放し飼いが多かったという。そういえば、ぼくが幼い頃、野良犬たちが群れをなして道を歩いていて怖い思いをなにかしたことがあった。それでも猫や犬たちにとっては、今よりも自由を謳歌できた時代だったのだ。

「この猫ちゃん、オスみたいだから、あと数ヶ月したら去勢しなきゃいけないわね。そうしないと、発情期にこの猫も私たちも辛い思いをさせることにもなるからね」

ぼくは言葉を失った。猫を飼うということとは、とても重い責任を背負うことなのだと改めて思い知らされた。美子は続けた。

「今はネットや地域でも、捨て猫や捨て犬、飼っていた動物たちが子供を産んでしまつて飼えない人たちが里親を募集して、飼い主をさがすこともしているけど、里親を希望する人のなかには怖い人もいるのよね」

美子はミャーの背中をなでながらいった。

「美子、どうということなんだ？」

「なかにはワニなどの大型動物の餌のために猫や犬をもらっていたり、実験用いたり、虐待目的のために里親になる人もいるのよ」

「マジかよ！　しかしなんでそんなことができるんだよ」

美子は少し微笑みながら、

「そうよね、まったくわからないわよね。」

でもね、この猫ちゃんも外にだしたら、ネズミやスズメなんかも捕ってくるのよ。私の実家の猫なんて、半分だけのトカゲなんかも口にくわえてもってきたことがあるのよ」

自然界とは弱肉強食の世界。それは人もおなじこと。猫や犬の餌とされるものにも魚や肉類が入ってる。ただ、飼い猫の場合は、捕ってきたものを食べるのではなく、おもちゃのように遊ぶだけだと本に書いてあった。しかしながら、美子の話を聞いてぼくは、少なからずショックを受けた。世の中には、



最初は可愛いといって猫や犬を飼うのだが、途中で飽きて、もしくは飼えない事情ができて捨ててしまう人がいることは聞いたことはよくある。しかし、里親になろうとするくらいの人だから、みんな動物が大好きなのだと思っていたのだ。

ミヤーは、黙りこんだぼくの手をなめて、「ミヤアウン」と鳴いた。

美子はペットに関してにはベテランで、猫のさまざまなことを知っていた。飲み水を用意していても台所の水や花瓶の水を飲みたがること。きまぐれでわがままな猫を支配しようとしないうことなど。美子にいわせると、人間に服従しないところが可愛いのだと話していた。

ミヤーが美子のお眼鏡にかなってから三ヶ月。ミヤーが、テレビをみているぼくの膝のうえで、ときおり寝言らしい鳴き声をたてながら眠っていた。キジトラの柄で、丸く

なつて眠る姿はアンモナイトのようにもみえた。家のなかではどこにいてもまとわりついてくるミヤー。トイレに入れば自分も入れてほしいとニャアニャアと鳴く甘えん坊で可愛い猫ちゃんだ。ただ、おもちやのネズミの尻尾を食べるなど、なんでも食べてしまふところがあつて、そのたびにそれらを排泄するまで心配させられることもあつた。ミヤーはぼくの膝のうえで眠っている。ミヤーの体も三倍くらい大きくなつたようだ。はじめてミヤーと出会つたとき、ミヤーは片手に乗るくらい小さかつた。でも、今は膝のうえで狭くなつていた。

そんなミヤーをみると、父の転勤で北海道に住むようになった頃、放し飼いをしていた二匹の猫たちのことが思い出された。ぼくの家は官舎でペットを飼うことが許されていなかった。幼い頃からさまざま動物たちと暮らしていたせいか、ペットのいない生活は、なにかが足りない、どこか

寂しい気持ちで過ごしていた。そんなある日、ミヤーとおなじキジトラ模様の雌猫が、子猫を口にくわえて堂々とぼくの家に入り、その子猫をポトンと置いていったのだ。しばらく呆然としているぼくや弟、母をながめていた猫は、しらん顔をしてそのまま外にでていったのだ。

猫は外と家を自由自在に出入りし、翌日また別の子猫を口にくわえてやってきた。そしてまた翌日もう一匹の計三匹。おそらく、家の者たちを見定めて、この家なら子猫ともども養ってくれると考えての行動だろうと思った。猫はなんて頭がよいのだろう。それを悪知恵というか、生活の知恵というかはさておき、本格的に飼うつもりがないままに、猫たちは、なし崩し的にぼくたちの家を住処と定めたようだった。

そして二匹の猫が成猫になった頃、親猫の片眼がつぶれていることに気がついた。ほかの猫との喧嘩なのか、人のいたずらな

のかわからないが、ある日、広い道路の真ん中で、車に轢かれて死んでいた。ぼくは、子猫が成長したことを見届けて死んだみたいだと思った。猫の神秘的な、人に服従しない孤高さが心にずっと残っていた。

ミヤーは、ミルクから育てた子猫で人間慣れしているからなのか、ぼくの家にお客さんが来てもまるで警戒心がない。目にとまらぬはやさで玄関に行き、お客さまの足にすり寄ってしまう。なかには猫嫌いな人もいるかもしれないが、ミヤーはいまのところ誰からも愛されているようだ。少し意地悪に言えば、豊臣秀吉のような、人たらしな猫だといえるだろう。

猫は夜行性だというけれど、確かに夜中になるとやたらと暴れ回っては起こされ、少々寝不足気味だ。赤ちゃんの夜泣きに疲れ果てるという親たちの苦労を少しばかり実感している。思えば覚えていないとはいえ、赤ちゃんの頃はたくさんたくさん苦労

をかけたのだなと、今さらながらに親に対する感謝の思いが込みあげてくる。家に帰るとミヤーがかならず出迎えてくれる。遅い帰りのときは足に飛びついて来る。ぼくがいないと不安なのだろうか。鳥たちは生まれてはじめてみたものを親だと認識するそうなのだが、猫もそうなのだろうか。それにしてもミヤーはよく眠る。暴れて食事をして眠るをくりかえすのだ。

ミヤーがぼくの膝のうえで背伸びをした。どうやらお目覚めのようだ。大きく口をあけてアクビを一度二度。それからゆっくりと膝から降りて、柱に取りつけている爪研ぎ用具に难道も爪をたてて爪を研いだ。

夜の食事を終わると、ぼくはいそいそと書斎に向かう。子供ができるまではぼく専用の部屋なのだ。デスクのうえのパソコンに電源を入れ、株の状態をみるために、スマイル証券のホームページをひらいた。昼間は携帯で株の取引を行うこともある。便利

な世の中になったものだ。銘柄はテレビでもよくでてつきからつきへと話題を提供している若い経営者が社長をしている会社の株だ。今のところ十五万ほど儲かっていた。百万ほど利益がでたら、家の敷地にもう一台くらい車を停めることのできる駐車場をつくりたいのだ。ぼくがパソコンのキイを叩いていると、ミヤーがやってきてパソコンのキーボードにうえに乗った。いつも株取引をはじめると邪魔をしにくる。株以外のホームページを閲覧しているときは、膝のうえや近くで寝ているだけなのだ。

「ミヤー、どうしたんだよ。なぜいつも株をやろうとすると邪魔するんだよ」

ミヤーは首をかしげて、ぼくをじっとみつめていた。なにか言いたげなのだが、猫の心がわかるわけもない。どこかの本に、猫や犬たちは人間の話している内容がある程度わかっていると書いてあった。猫と一緒に暮らしている友人の話では、家族で、病気が

ちだった猫の話を台所でしていたそうさ。  
猫も近くにいたらしい。医療費で家計が苦しいという話だったそうさ。すると、翌日からその猫は具合が悪そうなそぶりをみせなくなつたという。そして一週間が過ぎた頃、突然ぽっくりと死んだのだという。また、父親が猫嫌いのため、猫と暮らすことができない友人が、いつの頃からかやってくるようになった野良猫二匹に、こっそりと餌をあげていたそうさ。しかし、その友人が失業し、懐具合も悪くなつてきたので、野良猫たちに、もうごはんをあげられないの、と話したそうさ。すると、その野良猫たちは、翌日から来なくなつたそうさ。友人としては、餌もまだ部屋に残っていたので、それを全部あげてからのつもりだったらしいが。不思議なことだけれど、猫には人が考えていることがわかるのかもしれない。

とにかく、現在買っている銘柄は、あがつたりさがったりはしているけれど、まずま

ず安定した利益をだしていた。妻の美子は株でのさまざまな事件やニュースをテレビでみるたびに眉間の皺をつくるので、極秘中の極秘にしていた。株をしていることなど知られたら、雷が落ちたときのような騒ぎになることは目にみえていた。

とにかくミヤの関心をオモチャのネズミや転がして遊んだ。音のする球などでそれらしてパソコンの操作に専念だ。キイを連打するとミヤがキイを打つ音が気になるのかなんどもこちらをみるが、ぼくはパソコンのモニター画面に気をとられている。とにかく株は一秒ごとに変化する。あつとつとに株価が下がってしまうこともたびたびあるが今までは運がよく下落する株を買ったことはなかった。しかし今夜はちがった。ぼくが買っていたCYUという家電会社の株が下がり、下がり、売ろうとしても処理できずに底値まで落下していった。ぼくはすぐにテレビをつけてみた。なんと



CYUの社長がインサイダーの疑いで事情聴取を受けるというニュース。言葉もでなかった。ただ呆然としてテレビ画面をみつめていた。テレビ画面がどろどろに溶けてゆく真つ黒な溶岩にみえてきた。

龍が天に昇るが如く、うなぎ登りに株価があがっている会社だったためか、金融会社からお金を借りて、CYUにつきこんでいたのだ。どうしたらいいのだろう。ざっと百万ほどのマイナスだ。美子になんといえよばよいのだろう。悪いときには悪いことが重なるもので、美子がぼくの背中を叩いていた。

「えっ、なに？」

「満彦！ なにをしてるの、ミヤーの尻尾を踏んでいるじゃない」

ハッと我にかえると、ミヤーがけたたましい鳴き声をあげていた。あまりのショックでミヤーの尻尾を足で踏み、ミヤーの鳴き声すらも聞こえていなかったのだ。

「ああ、ミヤー、ごめんごめん」

美子の顔が怒りの形相だ。美子は震える指先を、パソコンのモニターに向けていた。

美子はモニター画面をくいいるようにつめ、

「満彦、あなた、株をやっていたのね。それに、ずいぶん損をしたみたいね。先日、庭を掃除していたら、結婚指輪をどこかに落としたみたいで、満彦にも探してもらおうと思って部屋に入ってみたら、もう、ここそこそと」

逆ギレしてしまったぼくは、ついああだこうだと言いつ返し、美子を本気で怒らせてしまった。

「株で損をしたことよりも、私に相談なくやっていたことが情けないわ。ちよつと頭を冷やしたいから、しばらく実家に帰るかだね」

あれから一週間。美子のいない家は、まる

で模型でつくられた世界のように味気なく、  
なにか自分自身の存在さえ薄れて感じられ  
た。一人で食べる食事も寂しくて美味しく  
ない。美子に詫びて帰ってくるように電話  
をしようとするのだが、なんとなく延び延  
びにしてしまっていた。そんなとき、ぼんや  
りとしていたせいか、ドアをあけたスキに、  
ミヤーが外に出てしまった。すぐさま追  
かけたけれども、もう夜も十時を過ぎてい  
た。首輪の鈴の音は聞こえるけれども、ミヤ  
ーの姿はどこにも見えなかった。ミヤーは  
箱入り娘ならぬ、箱入り息子だ。家に閉じこ  
めておくのはなんだか可哀想だと思い、屋  
根の上を自由に散歩させることもあった。  
猫用リードをつけて、一緒に家のまわりを  
散歩をしてはいるが、自由には外出はさせ  
てはいなかった。ぼくの家の周囲の道路は、  
車も始終走っているし、野良猫たちもいる。  
なによりも、最近よくニュースでみる、猫を  
虐待し、いたずらをする人もいるかもしれ

ない。もう、いてもたってもいられず、冷や汗をかきながらミヤーを捜し続けた。近くに寄ってくることはあっても、自由の身になつたチャンスをみすみす逃すものかと、目にもとまらぬはやさで素早く身を翻して走ってゆく。

いちど家に帰り、気を落ち着けてはまた捜しにでかけた。今はまだ車も通らないからよいが、朝になったら通勤で車が多くなる。はねられたミヤーなんてみたくはなかつた。ミヤーの名前を呼びつつ、懐中電灯をあちらこちらに向けては、ミヤーの姿を追う。ミヤーは家のなかでよくやる追いかかけこのつもりなのか、なかなか捕まらなかつた。

ぼくは家の玄関の戸を少しあけて、ミヤーが帰ってくることを信じながら待つことにした。しかし、夜中の一時をまわっても、ミヤーは帰ってこなかった。しだいにミヤーに対して腹がたってきた。ミヤーはぼく

のことを親のように慕ってくれていると思  
っていたが、本当は、ごはんをだし、寢床を  
提供してくれるだけの存在だったのだろう  
か。ミヤーは安定した生活ではあるが、いつ  
も窮屈な思いでいたのだろうか？ そうし  
た家を離れて自由を選択したのだろうかと、  
不安と苛々した気分、そして寂しい思いが  
複雑な交差して、ベッドに横になっても、ま  
ったく眠れなかった。

そうこうしているうちに、窓の外が明る  
くなってきた。夜の闇が、空の時計を気にし  
ながら、どこかへと帰り支度をしようとし  
ているようだ。すずめが朝を待ちわびたよ  
うにさかんに鳴きはじめている。闇に脅え、  
ひっそりとして木々や電線にとまっていた  
すずめたちは、闇のなかでなにを思ってい  
たのだろうか？ 闇にくちばしをふさがれて、  
仲間の姿もみえず、闇のなかに自分さえも  
吸い込まれていくような、不安な思いで脅  
えていたのだろうか。

ぼくは改めて外にでて、ミヤーの姿を捜した。五月はじめの朝はまだ肌寒い。けれども、朝の初々しい風は、疲れた心にはなによりも心地よかった。汗がほんの少しだけにじんできた。もうミヤーを探すのを諦めて、そろそろ帰ろうかと思い、家の玄関に入ろうとしたときだ。家の庭のあたりにミヤーがちよこんと座り、ぼくをじっとみつめていた。ミヤーの名を呼ぶと、ミヤーが勢いよく走り込んできた。なにやら興奮し、治まらないようで、家のなかじゅうを走り回っていた。ぼくはほっとしてそのままベッドに倒れ込んで寝た。無情にも目覚まし時計が鳴り、寝不足のまま仕事にでかけた。

母は私が二十四歳のときに亡くなり、父も数年前に肺炎でこの世を去っていった。そんな傷心の日々を送るぼくの目の前に現れたのが美子だった。新聞でぼくの父が亡くなったことを知り、お悔やみの電話をく

れたことがきつかけになり、再び美子と会うことになったのだ。支えてくれた美子がいたからこそ立ち直ることができたのだと思う。美子とは別れと再会をくりかえしてきた仲だった。腐れ縁なのか、縁が深いのかわからないが、ぼくが苦しくてどうにもならない時にかぎって再び現れてくれる不思議な存在だった。人は一人では生きていけないものだなと、美子とのふれあいのなかで強く深く思い知らされた。

ぼくの膝で眠る、ミヤールの背中をなでながら、

「ミヤールが邪魔していたのは、きっとこうなることがわかっていたからなんだろうな」と、いうと、ミヤールは尻尾をふりながらひとつつ大きなアクビをした。まるでそらみたことか、と呆れているかのように。そしてぼくの膝から跳び起きて、大きくのびをする。と、電話機のうえに飛び乗って動き回りなんどかピポパと音をたてていた。そして後

ろ足で受話器を蹴り上げた。しばらくすると受話器から美子らしい声がする。ぼくは急いで受話器を取り上げた。

「美子？」

「そうよ。もっとはやく電話をしてくるかと待っていたのに……」

「ああ、ぼくが悪かった。もう二度と株には手をださないよ」

「そうしてね。満彦」

どうやらミヤーが乗ったボタンは短縮番号で、美子の携帯電話にかかるものだったらしい。偶然なのだろうが、ミヤーが電話をかけてくれたのだとはいえなかった。それ以上に、懲りずに猫のペットフーズ会社の株で、百二十万ほどの利益をだしたなんてことは口が裂けても話せはしない。とにかく、ペットフーズの株で利益を得たことを機会に、もう二度と株には手をださないつもりだ。それにしても、ミヤーにとっても夫婦喧嘩は消化に悪いものらしく、ミヤーが



電話機の近くで嘔吐していた。吐いたものをかたづけようと近寄ると、嘔吐した毛玉のなかに、美子が無くしたと話していた、結婚指輪が光っていた。

了